

副作用って、害じゃないの？

治験コーディネーター見習い中の薬局薬剤師が「薬担当者の小喃^{こぼなし}」として、医薬品の開発や薬の使い方を医療関係者の視点から伝えていきます。

使い方によって、益にも害にも

「副作用」とは「病気を治す作用とは別の作用」のことで**全ての方にとって害になるとは限りません**。症状や体質によっては**益が益とも限らない**こともあります。今回はその中の一例をご紹介します。

飲み薬の一種である利尿剤を例にあげてみます。**利尿剤は血圧を下げる作用**がありますが、この作用は益にもなり害にもなります。利尿剤は腎臓に作用して体内の水分を尿として排泄することで血圧を下げます。この利尿作用は**下半身のむくみを改善**するためにも処方されることもあります。

では、**血圧が正常の患者さんが、むくみで受診した場合、利尿剤はどついでしょうか？**むくみを改善する為に服用するので血圧低下は副作用になります。もし血圧が下がり過ぎた場合、立ちくらみなどを引き起こす原因にもなりますので**注意が必要です**。



他には、**副作用を有効活用**することもできます。風邪症状の咳止め薬の一種で、脳内の咳に関わる神経を休ませることで咳を抑えますが同時に眠気が出やすい薬があります。この**眠気を利用**します。人は眠りに入ると気管支が狭くなります。そのため、咳が出やすくなり、症状が強いと眠りを妨げてしまうこともあります。そこで、**眠気が出やすい咳止めに寝る前に飲んでもらうことで、十分な睡眠がとれるようにします**。



「想定外の副作用」も有効活用されている

実際に薬を服用してみると**予想していた作用とはまったく別の効果**がでることがあります。胃薬がアレルギー反応抑制の効果を持っていたり、抗アレルギー薬が食欲を促進させる効果を持つことなどです。新しく発見された**副次的な効果(副作用)を狙って薬が処方される**ことは少なくありません。販売前の治験では関係が無いと思われるような検査を行いあらゆる身体への反応を調べています。そのため、害になる作用はもちろん**思わぬ良い作用を見つける**ことが出来ています。

インターネットを利用すれば薬の一般的な効果や副作用は簡単に調べることができますが、医療は日々進歩しています。新しい治療方法や前には知らなかった効果が発見されて、副作用が害にはならない方法も明らかになっていくものもあります。

「副作用」という言葉に惑わされてはいませんか？

副作用について心配な方は、薬剤師にご相談を。